しつぽりと小町も一度雨に濡れ

小野小町と云へば美人の代名詞に使はれる程の美人である。どれほどの美人だつたかは知らないが、兎に角現代でも小町は斷然美人をリードして居る。小町は死んでから千年以上も經つて居るのに、小町に代る美人が出ないなぞは情けない。その小町が深草の少將に見染められ、百夜つゞけて通つたらばと約束したところなどは、何とかカフエーの女給式で面白い。ムキになつた少將は九十九夜まで通つたが、百夜に當る夜が大雪で、通ふ途中で降り埋められ、到頭凍え死んでしまつたのださうだから可哀さうだ。

さうして男と云ふ男を振り切つた小町だが一度はしつぽりと濡れたと云ふのだから耳寄りだ。しかしそれはローマンチックな話ではない。あの有名な雨乞の歌である。小町の雨乞ひは勅命だつたのだから光榮だつた。今日まで小町雨乞の歌として殘つて居るのは『ことわりや日の本ならば照りもせめ、さりとては又天が下とは』と云ふのと、『千早ぶる神も見まさば立騒ぎ、天の戸川の樋口

あけ給へ』と云ふのと二通りあるが、小町集に出て居るのは後者の方だから、前のは俗説に誰か作つたものだらう。兎に角祭壇に坐してこの歌を詠むと、一天俄かに搔き曇り、沛然として大雨至つたと云ふのだから、しつぽりどころの沙汰では無い、ずぶ濡れだつたらう。

ても名歌さりとては又强い雨
上の句で曇り下の句でぶんまける
日の本はそら迄届く假名遣ひ
ことわりを小町一生云ひ通し

棚曳く雲の絶間より久米ドサリ

それは久米の仙人ばかりではない。物洗ふ若き乙女の白い脛がチラ〳〵と仄見えてはどんな人だつて總毛立つに疑ひはなからう。久米の仙人の事は『扶桑略記』や『今昔物語』『徒然草』『元亨釋書』等で有名になつて居るが、實際雲の上を飛んで歩いた人だかどうかは眉唾ものだ。しかし書き記されたものゝ中で、大和國高市郡の人だと云ふ

ことは共通のやうだから久米の某と云ふ人があつたことは事實らしい。一說には萬葉集の中の久米禪師のことを作意したものだとも云ふし、支那の『西域記』中から取つたものだとも云ふが、いづれにしても、一度超人間的修行を積んだ仙人が、心氣一轉して俗間の生活が戀しくなつたと云ふ說話の物語化したものであると見るのが當を得て居るだらう。浦島太郎が龍宮生活に飽きたのと同樣な筆法で敎訓的に出來上つたものに相違ない。それにしても恐るべきは女難である。今でもモダン久米仙が銀座あたりで每晩のやうに墜落して居る。

仙人を素人にする美しさ

辨慶は山で育つて川ではて

辨慶は比叡山の學頭西塔櫻木の僧正の許にあつて學問の修行をした。稚兒姿の辨慶が、阿和佐と云ふ女の袖を引き只一度妹脊の契を結んだと云ふのは一世一代のローマンスである。『辨慶と小町出雲のわりあまし』などと云ふ句もあるから、女嫌ひで有名な坊さんであつたことは慥である。五條の橋で牛若丸に打のめされ主從の約束をしたと云ふ話も有名で

「五條では打たれ安宅で打ちのめし」と云ふ句さへ殘つて居るのを見ても、義經に附いて歩いたのは事實だらう。しかし、彼は奧州衣川で飛び來る矢彈を全身に浴び、立往生をしたと云ふのだから勇壯豪毅である。これほど名高い辨慶が『大日本史』などに見えないのは何故だらう。後世の人が作つた人物だとも云ふが、『東鑑』や『平家物語』等にも二三行出て居る位だから、居たには居たらうが第一辨慶の苗字を知つてるものがあるかしら。

一說には紀州の產で、牟婁郡田邊の別當、湛增が宅跡の側が辨慶出立の地だとも云ふが、これも餘り信じられない。しかし、二八あまりの稚兒姿、と淨瑠璃にある通り、絕世の美男子だつたと云ふことは、小町が男を嫌つたと同樣、女に恬淡なところから想像されたものに相違ない。それが繪にかゝれると强勇武骨の異相となつて居るのだから、何がなにやら判らない。炬燵と首ッ引をして居る影辨慶の優男なら、いまでもザラにあるが‥‥

辨慶と小町出雲のわりあまし
武藏坊とかく仕度に手間が取れ
武藏坊水車ほど背負つて出る

源左衛門鎧を着ると犬が吠え

最明寺時頼入道が、民間視察の爲め、諸國遍歴するうち、佐野源左衛門の家に泊まつたと云ふ話は童話や謠曲で有名である。鉢の木を惜し氣もなく圍爐裏へ燻べて饗應した佐野源左衛門常世の眞心が、遂に鎌倉の事變に蘇り、三ケの莊を賜つたと云ふ目出度い話である。零落はすれども武士の魂、槍一筋、鎧一着、痩せたりとも一匹の馬はいざ鎌倉の御用にと、雪の夜語に述懷する常世の見上げた心持が、時頼には嬉しかつたのである。時頼が鎌倉へ引上げると、茲に一大事變が起つた。その事變が何だか判らない。兎も角も佐野源左衛門常世は、つゞれの鎧を着用なし痩馬に鞭打つて駈けつけた。『佐野の馬戸塚の坂で二度轉び』『佐野の馬さて首を垂れ屁をすかし』などと云ふ句が詠まれて居る位だから、この巷說は相當に根據があるらしい。

けれども『佐野系圖』には佐野源左衛門常世などと云ふ人は見當らない。只これと似た話は『增鏡』の中に老女の話としてそれらしいものがあるだけて『北條九代記』や『太平記』には攝津の難波浦で泊つた家の老女の身の上を聞きその老女の家を取立てゝやつたと云ふのが載つて居る。して見ると『鉢の木』は一つの傳說か、失業武士に對する北條の政策的宣傳かどつちかであらう。いまの資本家中に最明寺殿ほどの心掛けの人は居ないかな。

最明寺其夜とう〳〵風を引き
あごで蠅追ふやうな馬常世もち
人ならばとうに出て行く佐野の馬

双方にけが無い勝負甲斐越後

武田信玄と上杉謙信とは我が國スポーツ的戰爭の典範を殘した名將である。敵國に鹽を送つたなぞは將に弓矢のみに依るスポーツでなければならない。それと云ふのも双心佛心に歸依し、大悟徹底して居たからだと人は云ふ。なるほど上杉輝虎入道謙信、武田晴信入道信玄とあるから双方坊主である。坊主にけが無いなどは可な

り古い洒落だが、物の記錄によると双方共入道ではあつたが坊主ではなかつたさうだ。何も坊主だらうが無からうが歴史の沽券に拘はる一大事では無い。しかし有髪の入道と云ふと、佛門から云つても少し趣が違ふ。高野山成慶院に藏するところの武田信玄の壽像には五十歳前後の容貌に立派な髪がある。これは武田勝頼が信玄歿後、祈願所たる成慶院に寄附したものだから、信を置くに足るべきものであらう。

また謙信の方は舊領越後のある寺院に納めてあるが天正三年謙信自筆の祈願文中に、去年十二月十九日法體せしめ、沙門を遂げ以來護摩灌頂まで執り行ひ、既に法印大和尚に任じ云々とあるから天正二年十二月になつて初めて頭髪を剃つたものと思はれる。五戒を保つ僧侶の身で、殺生をこれ事として居た二人の心持はいまだに解せない。尤も現代には佛門歸依の身で邪淫戒を犯して居るものも少なくないが……

信玄の在世あんまに事をかき
越後の謙信かけねなしのいくさ
煮えきらぬ中に甲斐へ鹽を入れ

當麻寺機のあまりを煮て喰べる

當麻寺の蓮の曼陀羅は有名な國寶である。その昔中將姫が蓮の糸で織つたのだと云ふ。その糸を取つた餘りは煮て喰べたのださうだが、幅一丈五尺の曼陀羅を作るには相當蓮根の相場を狂はしたものだらう。中將姫が繼母の爲めに雲雀山（日張山）へ捨てられて、幽谷を彷徨ふうち、大和國二上嶽の下丸子山の麓、當麻寺の實惟法師を師として尼となり薄命を卿ちつゝ念佛三昧に入つて居るところへ父右大臣豐成卿が狩に出かけた途中で聞傳へ尋ねて來て連れ戻つたと云ふのだがそれは大へんな誤りである。中將姫の母は百能と云つて、貞操無二の賢婦人であつた。夫豐成の薨去後も志を守ること多年であつた。勝寶の年從五位下を授けられ、寶龜二年從二位に進んだ程であるから、中將姫を繼子扱ひにしたと云ふやうな話は、百能夫人の爲めに甚しき寃罪であると云はねばならぬ。事實中將姫は父が寃罪を蒙り筑紫へ流されたのを哀んで、大和の當麻寺に這入つて尼となつたと云ふのがほんたうらしい。尤も現在でも無責任な新聞は直ぐに人を罪人扱ひにしてしまふ。

越前の命紀州で掘つて來る

大岡越前守一世一代の名裁判徳川天一坊の身許調べの苦難、劇でも活動でも寸隙を爭ふクライマックスである。もしも紀州で其材料が擧がらなかつた場合には、流石の名奉行も腹一文字に切つて果てねばならなかつたのである。ところがそれは眞ッ赤な嘘でもと〳〵天一坊などと云ふ人物は無かつたのだ。只當時品川宿秋葉山伏源氏坊天一と云ふのがあつた。この天一は改行と呼んで色白な美男子、同僚赤川大膳と企んではよからぬ詐欺を働いて居た。それを關東郡代伊奈半左衛門が召捕り享保十四年四月二十一日に處刑してしまつた。その間多少天一坊の傳說に似てるやうなこともあるので當時の大衆作家が尾に鰭つけて戲曲化したものであらう。大岡越前守は江戸町奉行である。管外の出來事に携はる筈はないのだが、名奉行だけあつて功名手柄を無理押しつけにされたものらしい。

阿鬼齊句抄

これは私が二十餘年間詠んだ句から選んだものです（編輯）

◇慥う思ふ

大臣になると新聞直ぐけなし
自働車で見れば惨目な人通り
皆俺を見て居るらしい晴衣裳
閣議みな辭職と定めて笑ひ合ひ
電話かと見れば振替口座なり
珍談の數を持つて小成金
見ろ見ろとブラ下つてる金鎖
立志傳うまい調子に金が出來

晩飯を一緒に食はう儲けづく
一段と聲を落して金のこと
経濟科出身と云ふ失業者
社會主義癪だくと書きなぐり
緊張の型は大禮服で反り
驛で撮る首相の寫眞まづい面

◇こんな事

追而書端書の横へ曲げて出る
賴信紙少し餘分に貰つとき

ペン先を替へてだけ無駄に書き
食堂を出て來たらしい爪楊子
指の先爪で押さえたこれつぽち
手で示す太さを譯もなく笑ひ
寢臺車昨夜の人と又一しよ
累計は筆を咬へたまんま寄せ
膝枕シガーの灰の捨てどころ
團體の寫眞笑つたのも交り
座布團へストンと坐る懷ろ手
蓁口を出して手袋口で肌ぎ

挨拶は笑つただけの顏馴染
新聞に俺の名に似た掏摸が居る
ようく見たら鼻つきが氣に入らず
書留にまた印肉のありどころ

◇獨り思ふ

拾ふ氣で振りかへつたが錢でなし
工面して見る煩杖は爪を嚙み
大金を拾つた記事を欲しく見る
大賢は愚にして嬶ア天下なり

貯金帳今に見ろとは思へども
吉松へ帶をしめ〳〵部屋を出る
銀行の札をさもしく見て歸り
自働車で妬いてさうなを見て通り
割算が三桁で少し考へる
成金を隣に持つて腹が立ち

◇商賣往來

何時見てもお客の居ない寶石屋
骨董屋仁王が賣れて店ちがひ

あの狸未だに賣れぬ瀬戸物屋
乾物屋女房と子僧豆を選り
春風を綺麗に受ける半襟屋
買はないと見たか本屋は積み直し
小間物屋戸棚の蔭でほどき物
藥屋の奥に小さな窓があり
風鈴屋呼べばフンワリ向きを替へ
泣いて居る兒へ玩具屋は拔いて見せ
人形燒みんな燒けるとぶちまける
鯛燒屋客の切れ目に炭を足し

骨董屋そつと包んで置いて褒め
代書人暇だと見えて紙を撚り
バナヽ賣ローズの方を食つて見せ
横にした戸から辻待首を出し
交換手怒れば素ッ氣なく佗びる
立止る按摩は杖に手を重ね
タイピスト辨當蓋の蔭で食ひ

◇この風景

日曜の寫眞に鳩と鳩の影

睡蓮は靜かに畫の蚊が生れ
賣屋敷何だつたのか邪魔な石
隧道へ入つてく汽車尻を振り
大寺は靜かに雪の夜が明ける
竹芝の海へ上總の月が浮き
伊勢の杉手眞似ぢや幅を話すやう
戸口から雪だ〳〵と起される
青嵐汽車から紙を投げて見る
岩清水呑まうとすれば百合の影
竹藪へ來ると夕立煙のやう

だるい足朝顔へ來て歯を磨き

つまみ菜へ秤ふんわり投げられる

打水の名殘り牡丹が少し搖れ

大廣間按摩は風を涼しがり

鬼灯が一つ赤い蕗畑

此風や渡船渡つて日一ばい

冬の月息吹かけて見たりけり

欄干の霜へ小僧は何か書き

雪だるま手傳つて行く御用聞き

◇小人閑居

物干で見える花火へ煙草盆

肥つてる女將ドッコイショと坐り

甘納豆掴めば底へ突當り

五分刈にするとポッ〳〵禿が見え

立話し日傘は肩で廻はされる

何か云ひ乍ら押してく乳母車

箱車犬をけしかけ乍ら行き

御用聞き小鳥の餌に智恵をつけ

床屋から出た山高はそつとのせ
追越しておいて自轉車振り返り
自轉車で小僧の尻がアッチコチ
手を出して貰へないのは舌を出し
飛びさうな帽子額が草臥れる
舊友に會へば眞ン中少し禿げ
やつと彈く三味線膝を辷りさう
吹き消した蠟燭鼻へ來て匂ひ
瓦斯管を覗いて通る車止め
チャップリン逃げる仕度に飛上り

くらやみの便所大きく跨ぐなり
馬鹿野郎馬鹿と云はれて腹を立て
降參をしといて雛妓舌を出し
小説のやうさと愚痴の切りが無し
俺もさう思ふと膝が二寸出る

◇生活風景

女客飽きたらしいに寫眞箱
父さんに馴らすは後が出來て居る
母の日を妻に敎はる五目飯

父さんをのけ者にして無事な家臺所の板の間歩く度に鳴り膝でしたシッコ赤ン坊捧げられ下着だけ去年の分で間に合はせ暇を見て來たと忙しい里の母末ッ子が泣いて飯事叱られる羽織だけ强請つて帶を謎にする融通の利く柄を選る子澤山寢ころんで見る新妻の針仕事おふくろは寢ると戸棚の方を向き

直しものらしい女房の長襦袢股引と足袋の間が寒むそな子

◇日常茶飯

鑵詰屋鏡を張つて倍に見せてなもんやないか二階の拭掃除伸び切つて頭が重いろくろ首生ビールコップを見せてもう一つ帽子掛け夏帽一度おつこちる踏みつぶしさうに玄關の夏帽子

旅仕度あんなにして〻忘れもの
握る手へ順に呉れてく選手の手
儲けづくこつちにもある折鞄
此處までと云ふ長唄を社長やり
犬の顆撫でればもつと〳〵延び
洗湯で何處洗つてる首つきり
首飾り馳けるたんびに胸を打ち
宿題の地圖にチャブ台借りられる
ハンケチで机を拭くとこんなゴミ

四角八面鏡

六年の算術に母ちゃんと困り
焦げた飯女房あんなに食べちまひ
何にでも利く母ちゃんのチンプイ
鼻と鼻嗅ぐのが初の猫の對面

學校と社で朝飯が二度になり
SUNDEY
日曜日
這つて行く兒がまゝ事の邪魔になり
種明しいつちしまひに旗が出る
標本の猿立膝へ手を重れ

汽車の窓から今度此方に月が見へ
俥から
俥屋の尻
面白し
俥から雛妓こぼれるやうに降り

寝てる子の頭がクガクガ子守も駈け
弟が見付けたバッタ兄が捕り
蟹売り荷物の中で剰銭を讀み
紫陽花の所ではぢける石鹸玉

日和下駄東京驛で八釜しい
WINSW
買物をしてる異人へ人が寄り
送り風下駄はスタコラサと吹かれ
オーパーを肩を搖で搖で値を聞かれ
此

突通すやうにボートは橋を抜け
MIJI…
KEIO…
WASED
終電車車掌話したそうな顏
停車場に近く線路がガチヤリンコ
意地惡のやうに踏切綱を引き

蛇口からの呑んでん懐ろ水だけ
剃刀を研ぐうち床屋顔を蒸し
大笑ひ何んだ〳〵と聞きたがり
一寸撮く頭ホントに痒くなり

約束が午後で二時間程飽きる
DON
寝返つてそろ〳〵元の鼾なり
向ふ脛机の下の蚊に食はれ
交換手先月號を讀耽り

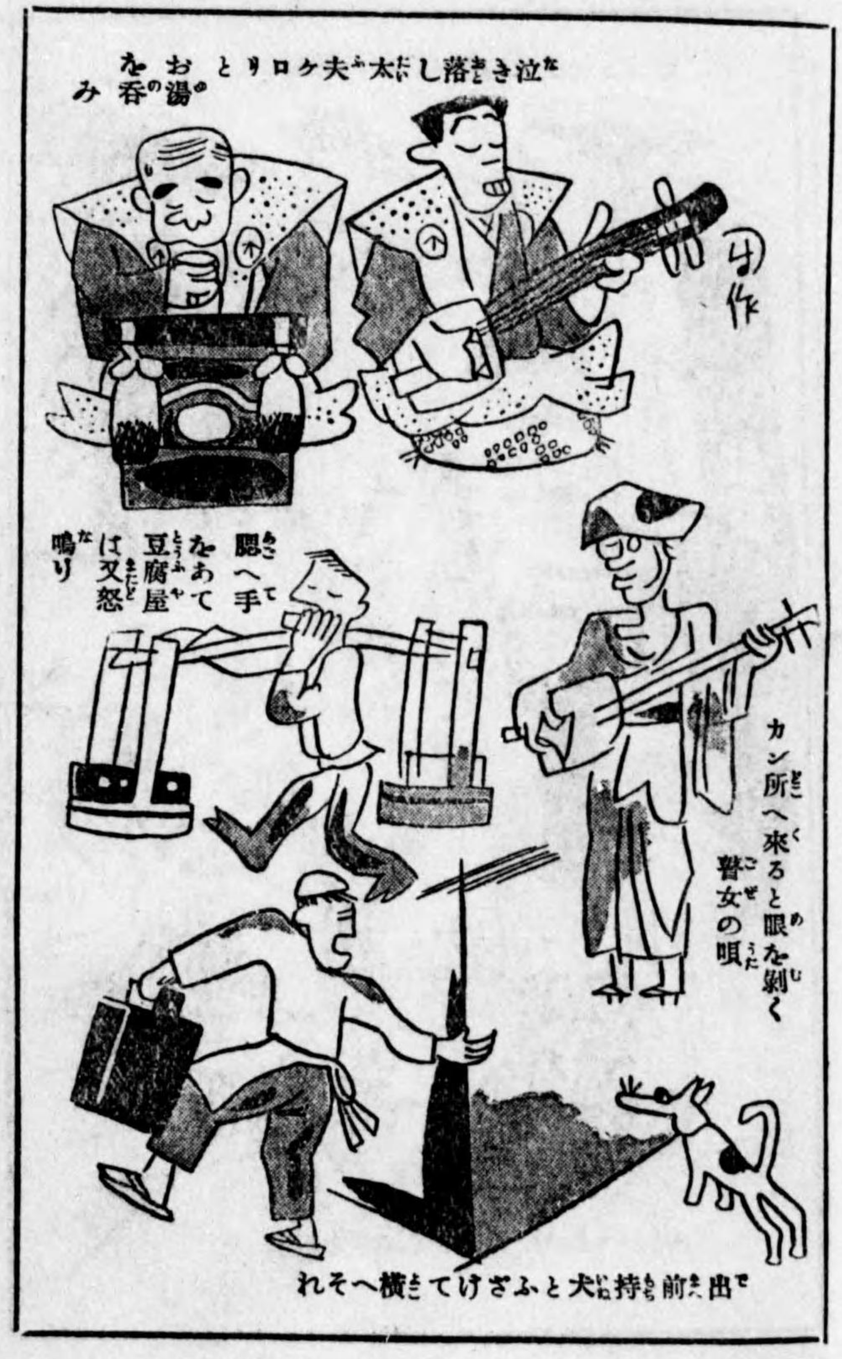
冷奴おつとどつこい
しよつと喰べ
御茶かけて
くれといや〳〵飯を食ひ
この菓子が
一ツ五錢と裏を見る
節穴が斜で銅がくたびれる

鬚を撫でて見せ
黒もじの饅促
結ひたての
髪は額で人を見る
トランクへ毛布を入れて膝で締め
封筒になつても一度墨を磨り

裸體像乳からは下は萬が道ひ
腕時計歐鐵砲の型で見る
撫でてやる馬の額のあたゝかみ
草花へ一人は二人が連れ

大切にしまつた切符見つからず
いろ〳〵な渦なのこし
て河馬沈み
大欠伸呑み込んだのゝ鼻の穴
仁王尊背中を洗ふ型で立ち

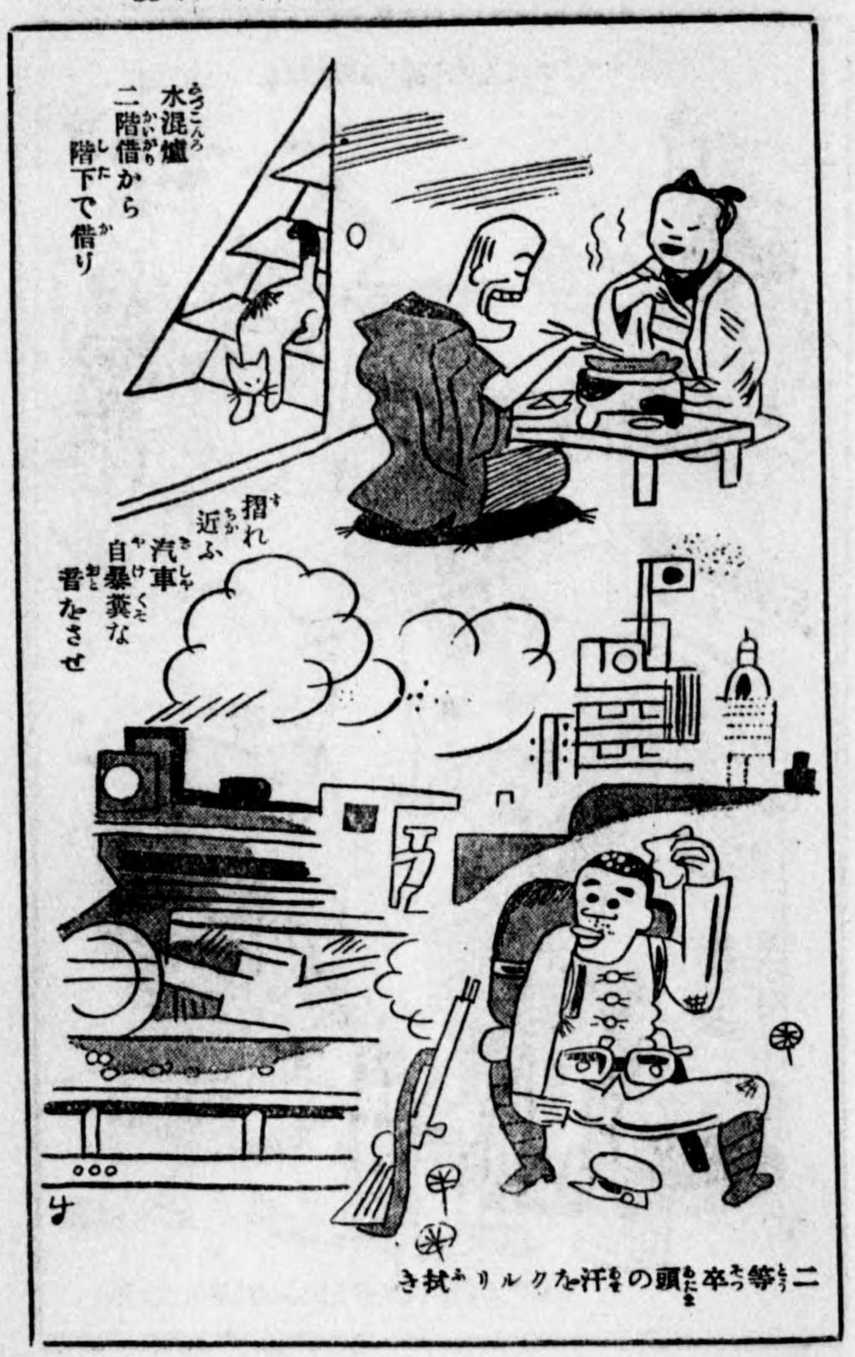
エレベーター追ひ出すやうにとあを扉にるけ
梯子段給仕は身振りして上り
受付で聞き
受付で聞き
ビルデンゲ
雨宿りすることがないなの丸の内


泣き落し太夫ケロリとお湯を呑み
カン所へ來ると眼を剝く
聲女の唄
腿へ手をあて豆腐屋は又怒鳴り
出て前持犬とふざけて横へそれ

五圓札母幾〻重にも幾〻重にも

睨めつこ鼻の大きなのに勝てず

蒸籠を出たやうに雨は舞れ上り
うがひするやうに鶏水を呑み
遠眼鏡ドレ〳〵と五六人
鉄瓶が輕いと顔で云ひつける


水混爐二階借から階下で借り
摺れ近ふ汽車自暴糞な看なさせ
二等卒の頭の汗をクルリ拭き

腹
中少
請求して
取を
受け
改めて
坐る生
膝を出し
釣革で
ふと中剃
のはげを見る
満員車向ふが押せば他も押し

半襟
屋主四五軒先きで待ち
福引
豆
真
寺
裏口を開けて
見て行く
小買物
運轉手ハミ出す客を尻で押し
福引の
糸巻
詫びる
やうに
呉れ

ずれらき起助編とるすをち立逆
坂路へ來ると辨當ゆすり上げ
鐘馗樣フオークの欲しい時もあり
ヒヨツトコはこぼした酒が甜められず

改まる話に撫でる瀬戸火鉢
聞き耳を一人たてると皆默り
親指を甜め〳〵小僧しやべり過ぎ
手の平を指でつゝくつゝ使ひ賃

耳掻きを出せば借手が五六人
頬杖の小指が届く鼻の穴
居睡りの肱で猫板少しずれ
家中が寄ってたかった桝落し

此處へ來て泣きなと月見艸が咲き

昭和五年八月五日印刷
昭和五年八月十日發行

不許複製

柳川文壹 淺養

なるほど艸紙　價壹圓五拾錢

著者　矢野錦浪

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地
發行者　株式會社　博文館
右代表者 取締役社長　大橋進一

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷者　君島潔

東京・日本橋 本石町・三ノ一六
株式會社　博文館
電話小石川七八〇〇番
振替口座 東京二四〇番

共同印刷株式會社印刷

今井柏浦	大正一萬句	價一・二〇 送・〇八	ホト、ギス派の俳句を中心とし、全國俳人の名句を渉獵して類別せるもの、作句座右の參考にして且つ大正名句集の觀をなす。
今井柏浦	大正新一萬句	價一・二〇 送・〇八	子攜系統に屬する全國俳人の句作を苦心蒐錄せるものより更に一萬餘を選擇して各部門に分類收錄す、俳人の座右必備の一書とす。
今井柏浦	大正新俳句	價一・二〇 送・〇八	「大正一萬句」に連續して、同樣の趣意の下に分類編纂せられたる句集。
今井柏浦	新撰一萬句	價一・一〇 送・〇八	現俳壇の主流をなせるホト、ギス派の俳句を類集せるもの、同好者座右の味讀に便し、兼ねて作句の參考に資す。
今井柏浦	最新二萬句	價一・三〇 送・〇八	「新撰一萬句」に蒐錄せられたる以後の發表に成る俳句を、同じ趣意の下に編纂す。
今井柏浦	明治一萬句	價・九〇 送・〇八	本書載するところ千三百題、特に明治の新題を悉く網羅し、明治俳壇を代表すべき唯一無二の句集である。
高木蒼梧	季題例句 俳諧歳事記	價二・二〇 送・一〇	例句は古今の俳書より名吟佳句を撰び、各季題については夫々簡明なる解說を附した。贈答俳句の作法を說き、作例を示せるは本書の特長。

鐵道省編纂	日本案內記 關東篇	價二・五〇 送・一二	調査嚴密なる事、確實なる事日本の代表的案內記として驚歎に價する出來榮である。
鐵道省編纂	日本案內記 東北篇	價一・八〇 送・〇八	鐵道省が五年に亙る苦心の編纂になる新旅行案內。色刷地圖三十三枚、アート寫眞二十四枚、挿繪三十六枚、木版刷別美麗口繪一葉。
鐵道省編纂	鐵道旅行案內	價三・〇〇 送・一二	書版大正十五年絕版以來三年鐵道省苦心の編纂になる權威的大旅行案內書。
鐵道省編纂	神もうで	價一・三〇 送・一二	日本全國の神社に就て由來を說き交通を詳かにし鐵道によりて參拜する人々の便宜を圖る敬神家は勿論旅行家の好伴侶。
田山花袋	京阪一日の行樂	價二・五〇 送・一二	京都大阪を中心に手近の旅行地は極めて多いそれを一々實際的にまた藝術的に描き出された案內記として唯一の好著作。
鐵道省編纂	溫泉案內	價一・八〇 送・四〇	昭和五年版の溫泉案內である。總て鐵道省最近調査に係るもの今更喋々するを要せず正確無比の案內書として世に定評あり。
田中阿歌麿	改訂 湖沼めぐり	價一・六〇 送・〇八	自然の景趣に富む湖沼の風致を加へ傍ら湖沼學より見たる科學的研究を加へたるもの湖沼の研究資料に兼て觀旅の好伴侶である。

近藤飴ン坊	趣味の旅	川柳をたづねて	價一・六〇 送〇・六
松川二郎		山の民謠・海の民謠	價一・六〇 送〇・六
渡邊萬次郎		山水紀行	價一・五〇 送〇・八
横井弘三	東京近海	島の寫生紀行	價一・八〇 送〇・八
近藤時司	史話傳說	朝鮮名勝紀行	價一・八〇 送〇・八
島浪男	景勝行脚	旅から旅	價一・六〇 送〇・八
田山花袋	東京近郊	一日の行樂	價二・五〇 送〇・一二

宮尾しげを畫伯の裝幀になる、興味豊富の清涼たる旅行案内、川柳同好の先人が自然名勝舊蹟等を如何に見て居るかを尋ねし名著。

山の民謠——海の民謠——酒の民謠——遊女の地方色と其唄、其他種々變つた方面より民謠を蒐集研究せるもの。

「日本の山水」「山水ところ〴〵」「あの山この里」に別る。一は著者が研究的な立場から見た山嶽湖海の描寫、一は學者たる著者の紀行文

東京附近—三浦半島附近—江の島—三宅島—高澤島—式根島—利島—大島—八丈島—父島—母島—スケツチ百餘枚入。

卓絶せる史眼と巧妙なる筆致を以て描かれたる朝鮮、旅行者には親切な案内書となり、史學研究者には絶好の參考書となる。

全國行脚の收穫たる「名勝行脚」弘法大師、俳聖一茶、酒仙大町桂月の現るゝ旅の隨筆六話。東京附近の三十名勝境案内。

東京を中心に近郊近縣に一日二日の樂しい小旅行を試みようとする人達に無二の相談相手花袋氏の名筆机上に讀むだけでも快い。

松川二郎	趣味の旅	新民謠をたづねて	價一・六〇 送〇・六
松川二郎	趣味の旅	民謠をたづねて	價一・六〇 送〇・六
齋藤隆三	趣味の旅	古社寺をたづねて	價一・六〇 送〇・六
松川二郎	趣味の旅	名物をたづねて	價一・六〇 送〇・六
松川二郎	趣味の旅	不思議をたづねて	價一・六〇 送〇・六
松川二郎	趣味の旅	武藏野をたづねて	價一・六〇 送〇・六
藤澤衛彦	趣味の旅	傳說をたづねて 上卷	價一・六〇 送〇・六

一代の詩人によつて作られた新民謠、無名の即興詩人の作つた地方民謠、すべてを收めて明日の民謠に呼びかける。

平凡無味な中に云ひ知れぬ味のある唄や純情的な牧歌等全國の民謠と云ふ民謠の總てを網羅し社會的趣味的文學的に說明せる快著。

京都と奈良は云はずもがな或は鎌倉或は東京、東は中尊寺に及び西は太宰府に至るまで其の間にある古社大寺を最近に訪ね尋つた見聞記。

所かはれば品變るで旅人に土地の名物位心を惹き寵めとなるものはない。本書は日本全國の名物に就て詳しく面白く書かれたもの。

世に所謂「不思議」と稱せられるものを、現代科學の力で或る程度までの考證と解決を與へて呉れるものが本書である。

武藏野を持つ事に東京人としての誇りを持ち且其の眞の風景趣味歴史やを味ふとする人々は本書に依つて限りない興味と滿足を見出す。

交通の順路を示し、風景を紹介し、その内に傳はる傳說を物語風に纏めて味ある筆致をもつて描いて居る。

大佛次郎著　幕末祕史　**鞍馬天狗**　價一、八〇八

幕末の京都江戸を舞台に勤王佐幕の爭鬪を背景とし「鞍馬天狗」と名乘る怪男子の活劇を叙す、規模雄大、構想絶妙、描寫驚嘆

大佛次郎著　鞍馬天狗　**御用盜異聞**　價一、八〇八

●熱狂的歡迎を受たる「鞍馬天狗」の續篇●御用盜とは？幕末江戸の大悲活劇變轉極まりなき凄烈なる殺陣の描寫讀者の血を湧す

大佛次郎著　幕末祕譚　**天狗騷動記**　價一、八〇八

蒐むる所長短十二篇殆く波瀾重疊哀切極まりなき人情の葛藤を新しき筆に描き出し作中人物の喜怒哀樂讀者をして興に感ぜしむ

大佛次郎著　江戸巷談　**艶說蟻地獄**　價一、八〇八

幕末史中その爽快夏の日の驟雨に譬ふべき藤田小四郎武田耕雲齋等の筑波の義擧壯烈なる史實を背景に不思議な戀愛關係を描く

笹川臨風著　應仁祕史　**流轉**　價二、〇〇八

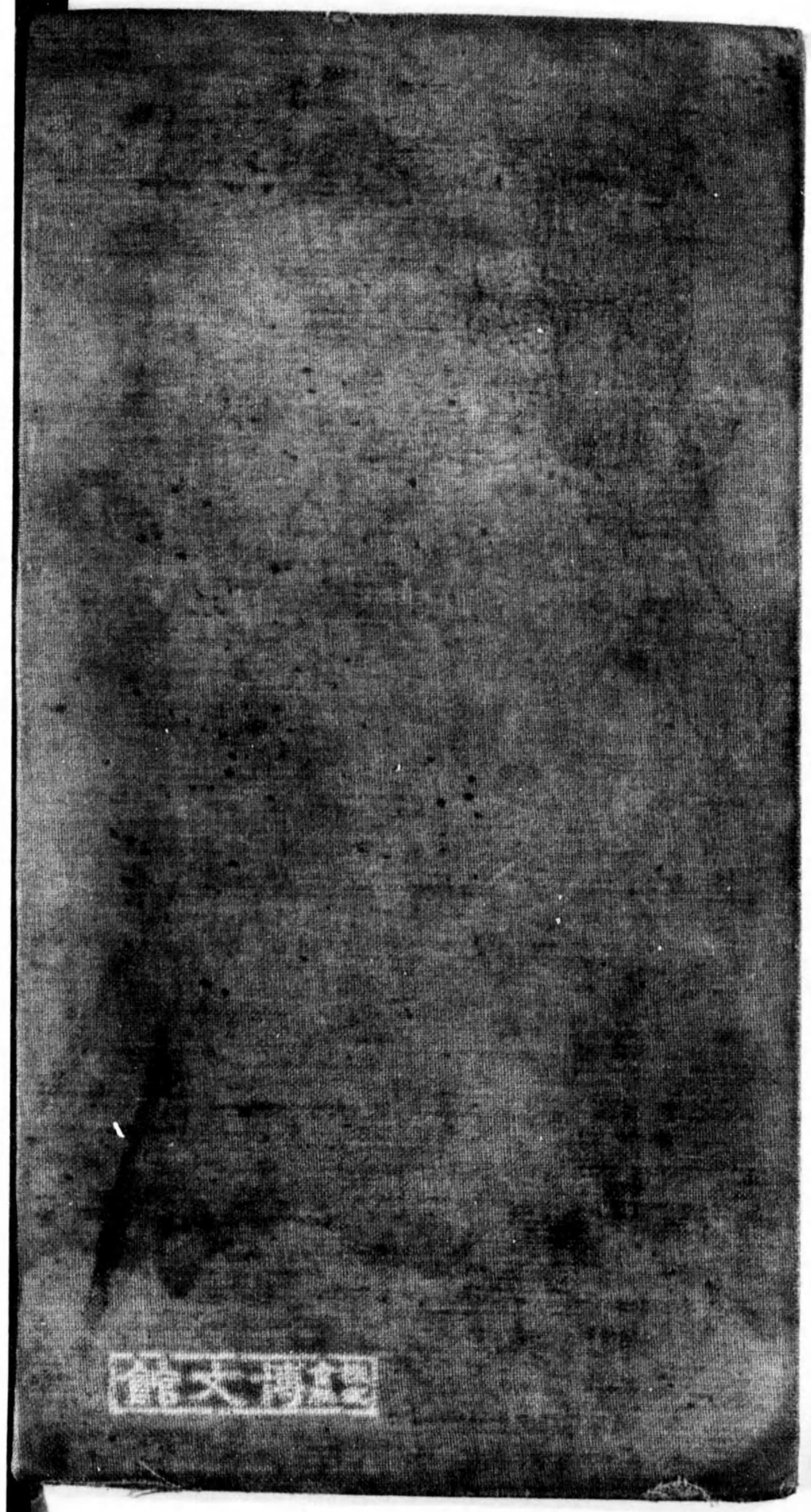
走馬燈の如き變幻出沒事件は事件を生み戀愛あり嫉妬あり計略あり美人あり金殿玉樓山塞古城人生時代の流轉を描出す。

高桑義生著　江戸祕錄　**黑髮地獄**　價一、六〇八

時は德川末期の黃金時代に起れる黑髮切りの怪事に取材せる妖艶無比なる物語。

流山龍太郎著　捕物綺談　**幻の義賊**　價一、六〇八

俠骨大盜幻の義賊に絡まる奇怪な事件を描破せる迫眞の筆致、近時稀に見る傑作。

357
288

終